

目的：今日、国民の健康問題は重大な国民的課題である。特に、日本の社会は、今後世界的に例のない速度と水準の人口高齢化の途をたどることになり、高齢人口の社会経済的負担は日本経済の成長を阻害し、国民生活の貧困化をもたらしかねない。このような重大な負担の中でも注目すべきは、医療費の激増である。いかにすれば、国民の望ましい健康状態を維持できるか否かにかかわっている。本報告は、健康から半健康状態あるいは病気への転換途上にもあると考えられるいわゆる「不定愁訴」の状態を家族形態ならびに地域別に考察し、健康増進への対策の手掛りにすることを目的としている。

方法：人口問題研究所において昭和54年に行われた「人口の高齢化に伴う生活構造の変化に関する調査」結果を基礎としたものである。調査対象地域は東京都（目黒区、墨田区）、広島市、山形市、宮城県（平地農村3町）、鹿児島県（農山村3町）である。調査対象者は30～59歳の男女約12,000名について配票自計方式で行った。回収率は92.3%である。なお、本調査で用いた箇所は次の通りである。1.食事がおいしくない。2.朝気分よく起きられない。3.夜よくねむれない。4.便通がよくない。5.働く意欲がわかない。6.以上のようなことはほとんどない。の6項目である。

結果：「不定愁訴」の内容の中でも一般的に、多くみられた訴之は「朝気分よく起きられない」であつて、都市で高く20%前後みられ、農村でも10%以上みられる。また、「夜よくねむれない」といった訴之については地域差は少なくいずれの地域も10%前後みられた。なお、家族形態別についての分析は現在検討を行っている。